



F I Aの過去・現在・未来

～バックキャスティングの勧め～

高知大学地域連携推進センター 受田 浩之

最近、頻繁に1970年代を意識することがある。ご存知の通り、1970年には大阪で万博も開催されており、昭和元禄に浮かれつつ高度成長の歪に遭遇した印象的な時代である。一方、70年代は技術革新（イノベーション）の面でも華々しい時代であった。ソニーのウォークマンやカシオのパーソナル卓上計算機、アップルのマイクロコンピュータ Apple II など、現在でも歴史的な発明として語られる製品が次々に誕生した。これらの製品はその後の継続的なイノベーションで、さらに高性能化・小型化されると共に、複合機能としてスマートフォンにすべて搭載されるに至っている。

いきなり時計を45年前の70年代に戻して恐縮である。なぜこの話から入ったかという2015年は45年という時を大いに意識しなければならない年であったからだ。冒頭は過去に遡ったが、今年は将来に思いを馳せる「地方創生元年」とされる。ご存知の通り、我が国はすでに人口オーナス期に突入した。これから45年間で約4000万人の人口減が予想され、このままでは国の力が低下し、経済活動そのものが停滞していくことが懸念されている。そこで政府は、2060年に約8700万人と予想される人口を何としてでも1億人程度に維持する目標を明文化した。その実現に向けて2014年末に「まち・ひと・しごと創生法」が施行されたのである。この法律により、日本中の都道府県、市町村は今から45年後の2060年における人口ビジョンとその裏付けになる総合戦略の策定を求められた。

今、各自治体は求められた人口ビジョンの策定に必死に取り掛かっている。高い出生率や人口の社会増をどうすれば実現できるのか。そもそもこの地方における衰退はなぜ起こったのか。本質的で難解な課題のソリューションを見つける果てしない旅路の始まりである。地方では賃金も含め満足のいく「しごと」の場がない、交通の便や医療・福祉の不安が大きい、結果として求められて

いる「ひと」が不足して「まち」の機能が維持できない。抜本的解決策があるのならばすでに策を講じているというのが正直な思いであろう。単なる数字のシミュレーションでは実現への道のりは見えてこない。

この解決への決め手は「どうするか」という不安から脱却して「どうするか」の議論へ誘導することに尽きる。45年も先のことは「分からない」と考えるのではなく、「こうあるべき」とイメージして、その姿を実現する上で「今」をどう描くか、いわゆる「バックキャスティング」の手法が求められている。

過去から現在に至るイノベーションが生活をどのように変貌させたかは上述の通りである。これからの45年はさらに指数関数的に変革のスピードは増す。ICTの進歩ですべてのものがネットに接続された世界（IoTやIoE）が実現し、人工知能（AI）、ウェアブル端末やロボティクスが進化する。人間の知能を超えたAIにより自動運転が当たり前となり、高齢者の移動に困難はなくなる。介護ロボットやロボットスーツの装着で高齢者もバリバリと一次産業の担い手として勤しんでいる。健康情報もリアルタイムでモニターされ、予防医学の発達で健康寿命が平均寿命と一致している、そんな世界ならば現在の地方が抱えている課題の多くは解決されているとも楽観視できる。イノベーションが地方に与える恩恵は計り知れないという前提で、2060年の各地域の「あるべき姿」を可視化する。イノベーションによる地方創生の実現を目指すのである。

さて、70年代に創出されたF I Aである。エレガントな分析技術が2015年の現在までに大きく進化してきたことに異論はない。では2060年のF I Aはどうなっているのか？そうではない。「どうするか」である。2060年の我が国をイメージし、そこでのF I Aの役割を産学官総動員で議論すべきである。そこからバックキャスティングすれば今のF I Aのあるべき姿が見えてくる。